

令和元年6月5日現在

機関番号：17102
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2016～2018
 課題番号：16K21217
 研究課題名（和文）タンデム学習のガイドライン作成

研究課題名（英文）Tandem Learning Guidelines

研究代表者

脇坂 真彩子（Wakisaka, Masako）

九州大学・留学生センター・講師

研究者番号：90750662

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はEタンデムの実践と先行研究の調査に基づいて、日本語に関する「タンデム学習のガイドライン」を作成することを目的とした。まず、ドイツの大学と共同でEタンデム・プロジェクトを実施し、参加者への質的ケーススタディーを用いて、Eタンデムでの学習活動の特徴と、参加者の学び、使用される学習ストラテジーについて考察した。次に、日本語に関連する対面式タンデム学習とEタンデムの実践を比較した結果、両者には物理的制約、意味交渉の仕方、サポートの方法に違いがあることを明らかにした。これらの研究を基にして、最終的に「タンデム学習のガイドライン」の小冊子を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

タンデム学習は1960年代後半からヨーロッパを中心に実践され、1990年代以降のグローバル化の加速とIT技術の進歩によるCMCの日常化を背景に発展し、近年、日本を含む様々な国で広がっている。タンデム学習には様々な学習上の効果があることが明らかにされているが、本研究はこれまでになかった日本語に関連する「タンデム学習のガイドライン」を作成したという点で意義がある。このガイドラインの使用により、今後より多くの人にとって言語学習が身近になり、外国人と日本人の異文化理解にもつながると考える。

研究成果の概要（英文）：This study is aimed at creating guidelines for tandem learning related to Japanese language, based on eTandem research and previous studies, in the context of rapid globalization and daily use of CMC. First, eTandem projects were launched in collaboration with a German university and qualitative case studies were conducted. The results of case studies showed the features of learning activities in eTandem, learners' experience in eTandem project, and strategies used in eTandem sessions. Next, the result of the comparison between face-to-face tandem and eTandem related to Japanese language revealed differences in the following aspects: distance and physical restriction, the way of negotiation of meaning, and how to support each other. Finally, based on these studies, a booklet called "Tandem learning guidelines" was published.

研究分野：日本語教育

キーワード：タンデム学習 Eタンデム 学習者オートノミー 協働学習 学習ストラテジー 内発的動機づけ 自己
 主導型学習 質的ケーススタディー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

タンデム学習とは異なる母語を話す二人の学習者がペアになり、互惠性と学習者オートノミーを原則として、互いに言語と文化を学ぶという学習形態である (Brammerts & Little, 1996)。

タンデム学習は 1960 年代後半に、戦後のドイツとフランスの和解という政治的文脈で行われるようになったとされるが、その後、ヨーロッパの統合とそれに伴う言語政策の影響や、当時主流だったコミュニケーションアプローチの影響を受けながら、ヨーロッパを中心に様々な場面で実践され、発展してきた。さらに、1990 年代以降には IT 技術の進歩とインターネットの急速な普及による CMC (Computer-Mediated Communication) の日常化に伴い、CMC を活かした外国語学習が当たり前のこととなったのに伴って、インターネットを介して学習者 2 人がやり取りを行う「E タンデム (eTandem)」へとさらに多様化した。E タンデムの実践は、近年、ブラジル、アメリカ、中国、トルコ、オーストラリア、韓国などでも報告されており、ヨーロッパ以外の国々でも着実に広まっているといえる。一方、日本国内でも急速なグローバル化と IT 技術の発展によりインターネットを介した言語学習が可能となるにつれ、タンデム学習のニーズは徐々に高まっていると言える。これまでの研究で、タンデム学習には、目標言語でのコミュニケーション能力を伸ばす (Brammerts, 2005; Lewis, 2003)、異文化に関する学びが起こる (Stickler & Lewis, 2003; Woodin, 2003)、学習者オートノミーの発達を促す (Little, 2003)、外国語学習の動機づけの維持に貢献する (Bower, 2007; Ushioda, 2000; 脇坂, 2013)、外国語学習への肯定的態度を育てる (Wakisaka, 2012) という利点があることが明らかにされている。今後、タンデム学習がさらに多くの教育機関で受け入れられるようになれば、より多くの人にとって言語学習がこれまでより身近になり、外国人と日本人の異文化理解にもつながると考える。ヨーロッパでは 1994 年に国際タンデムネットワーク (International Tandem Network) が発足し、タンデム学習のためのハンドブックが各国語で作成されているが、日本語を含めアジア言語に関するガイドラインは管見の限り見当たらない。

2. 研究の目的

そこで、本研究では E タンデムの実践・研究、および日本語に関連するタンデム学習の先行研究の調査に基づき、「タンデム学習のガイドライン」を作成することを目的とした。そのために、脇坂 (2014) の研究をさらに発展させ、本研究では、具体的には以下の 2 点を明らかにすることを目指した。

- (1) 日本語とドイツ語の E タンデム・プロジェクトを実施し、参加者への質的調査から、E タンデムでの学習活動の特徴と、参加者の学び、使用された学習ストラテジーについて明らかにする。
- (2) 日本語に関連する対面式タンデム学習と E タンデムの実践を整理し、その違いを整理する。

3. 研究の方法

上記の二つの目的を達成するため、それぞれ以下の方法を行った。

- (1) ドイツのハノーファー大学と共同で学期毎に 6 週間の E タンデム・プロジェクトを 3 期に渡り実施した。各学期に協力者を募り、2 回分の学習中の会話データと協力者がプロジェクト期間中に書いた学習日記を収集した。また、プロジェクト期間終了後に質問紙調査とインタビュー調査を実施した。これらのデータから、E タンデムにおける学習活動の特徴と学習者の学びについて分析し、考察した。さらに、17 名 (ドイツ語学習者 9 名と日本語学習者 8 名) がプロジェクト期間中に書いた学習日記とプロジェクト終了後に実施したアンケート調査のから、E タンデムで学習者が使用した学習ストラテジーを調査し、分類した。
- (2) 日本語に関連する対面式タンデム学習と E タンデムの実践報告・研究を調査し、整理した。その上で、日本の大学キャンパスで行われた日本語と英語の対面式タンデム学習の三つのケーススタディーと、インターネット電話 Skype を介して行われたドイツ語と日本語の E タンデムの三つのケーススタディーを比較・分析した。

4. 研究成果

- (1) E タンデムにおける学習活動の特徴と参加者の学び

E タンデムでの学習テーマとしては「食べ物」「クリスマス」「お正月」「映画」が、多くのタンデム・ペアに共通して選択されていたが、そのほかの学習内容は各ペアによって大きく異なっており、学習方法もペアによって多様であった。

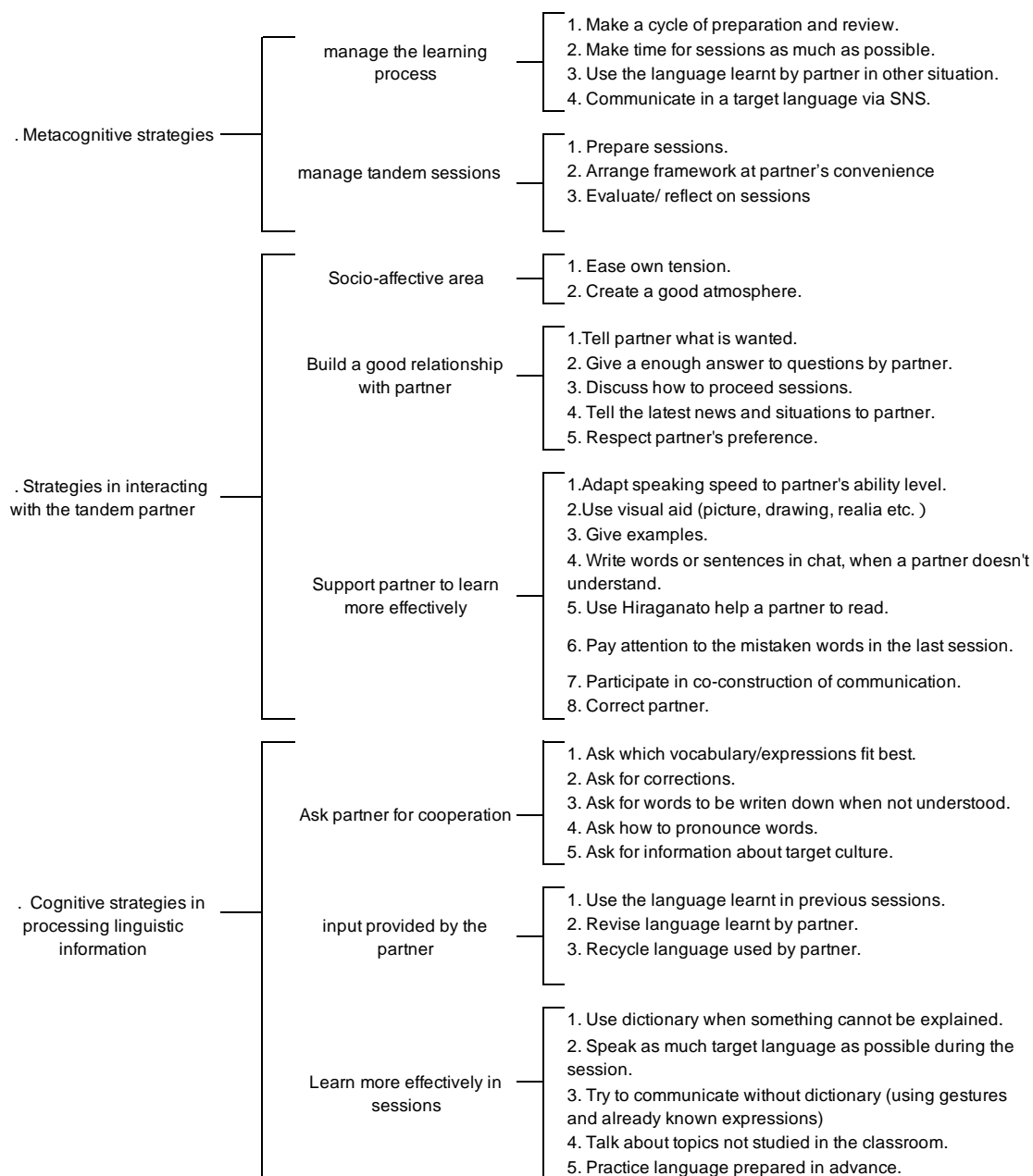
E タンデム・プロジェクトを通して、コミュニケーション能力が向上したと報告した学習者が最も多かった。「話し言葉がわかるようになった」「正しい発音を意識するようになった」「聴解力が上がった」との意見も聞かれた。また、「文化の学びがあった」「目標言語の使用に対する自信がついた」「母語に対する理解が深まった」という意見もあった。

タンデム学習でパートナーをサポートする際、サポートする側は、学習者の使用した語彙と発音に最も注意を向けていたことが明らかになった。また、「意図的に新しい言葉を

使うようにした」「パートナーにわかりやすい言葉遣いをした」「わからないことがないか確認するようにした」など、パートナーができるだけ多く目標言語で発話したり、学習したりできるように、さまざまな配慮をしていたこともわかった。これは、タンデム学習における互恵性の原則が参加者に認識されていたということだと思われる。E タンデム・プロジェクトは参加者に「学習環境がよい」「楽しい」ものだと捉えられていたことがわかった。また、目標言語や文化を学ぶこと、パートナーと良い関係が築けることが肯定的に捉えられていた。「母語について改めて考えることができた」「自分の外国語学習を振り返る機会になった」という意見もあった。一方、目標言語レベルが低いことから、言語の使用に偏りが出たり、コミュニケーションに対する不安を感じる参加者がいたこともわかった。

(2) E タンデムで使用される学習ストラテジー

プロジェクト終了後に実施した参加者への質問紙調査とプロジェクト期間中に書かれた学習日記の記録から、E タンデムで使用された学習ストラテジーを調査し、Otto(2003)を基に分類した。その上で、プロジェクト期間終了後に3ヶ月に渡り学習を継続したDとNのペアの質的ケーススタディを行い、手続き的ストラテジー (proceduralized strategies) を分類に加えた。E タンデムで使用された学習ストラテジーの分類を以下の図に示す。



ドイツ語と日本語のE タンデムで使用されたストラテジーの分類 (Wakisaka, 2018)

調査の結果、学習者は自身の学習を効果的に進めるためにさまざまな学習ストラテジーを使用していたことが明らかになった。同時に、サポートする側がパートナーの学習を効果

的にサポートするための多様なストラテジーを使用していたこともわかった。パートナーとの良い関係を構築するために、さまざまなストラテジーが使用されていた。学習者は E タンデムで学習した言語を使う機会を SNS 上で探すというメタ認知ストラテジーを使っていたことがわかった。これは Otto(2003)の分類では見られなかったタイプのものである。本調査では目標言語学習全体に関わる、目標設定や計画、評価についてのストラテジーについては言及されなかった。理由は不明だが、本プロジェクトでは枠組みが決まっていたからかもしれない。

(3) 学習継続に関わる対面式タンデム学習と E タンデムの違い

日本語に関連する対面式タンデム学習と E タンデムのケーススタディーを分析し、両者を比較した結果、タンデム学習における学習活動の維持に影響を与える3つの違いが明らかになった。第1に、対面式タンデム学習の参加者はセッションが行われる時間や場所に満足していた一方で、E タンデムの参加者は時差の問題や、インターネット電話をするのに適した静かでネットワークが安定した場所を見つけるのに困難を感じていたことがわかった。第2に、セッションでコミュニケーション・ブレイクダウンが生じた際、対面式タンデム学習では学習者は絵を描いたり、非言語コミュニケーションを使用して修復をしようとし、パートナーがわかるまでコミュニケーションを続けていたのに対し、E タンデムではまずオンライン辞書や電子辞書を使用し、その間、コミュニケーションを中断し、パートナーに待ってもらおう傾向が強いことがわかった。第3に、対面式タンデム学習ではサポートする側が学習者の様子を見て積極的にサポートを行っていたのに対し、E タンデムでは明示的なリクエストに応じてサポートが行われていたことがわかった。

(4) タンデム学習のガイドラインの作成

上記の研究成果をもとに、最終的に「タンデム学習のガイドライン」という小冊子を日本語と英語で作成した。第1章では、タンデム学習の概要(定義と原則、学習効果、歴史的変遷、タンデム学習の種類)をまとめた。第2章では、タンデム学習を実際に組織する際、どのようなデザインで行うかを考える上で必要となる知識をまとめた。第3章では、タンデム学習を効果的に取り入れるために、どのようなことに注意すべきかについて述べた。第4章では、学習者がタンデム学習を効果的に行うためのヒントや学習活動のアイデアを含めた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 3 件)

Masako Wakisaka, Face-to-face tandem and etandem: differences that influence the maintenance of tandem learning activities., *REVISTA DO GEL*, 査読有, 15 巻, 2019, 42-57

DOI: 10.21165/gel.v15i3.2408,

Yoshio NAKAI, Lixian OU & Masako WAKISAKA, Rethinking Learner Autonomy from Learners' Perspectives, *Conference proceeding of ILA 2016*, 2018, 262-272

脇坂真彩子, 日本とドイツの大学生による E タンデム: インターネットを介した学習者同士の学び合い, *ことばと文字*, 6 号, 2016, 88-97

[学会発表](計 8 件)

脇坂真彩子, 海外の日本語教育におけるタンデム学習の可能性を考える, ハノイ日本語教育研究会第3回講演会, 2018.11.

Masako Wakisaka, What are the Differences between Face-to-Face Tandem and eTandem via Email and Skype?, International Meeting on Foreign Language Learning In-TANDEM, 2018.03.

Masako Wakisaka, Qualitative study of Language Learning Strategies in tandem learning, Independent Learning Association 2018, 2018.06.

脇坂真彩子, 日本とドイツで実践したEタンデム・プロジェクトにおける参加者の学び, 九州大学高等研究院・九州先端科学技術研究所 研究交流会, 2018.01.

Masako Wakisaka, The Learning of the Participants in the eTandem Project between Japan and Germany, The Japan Association for Self-Access Learning, 2017.12.

Masako Wakisaka, Various frameworks for Supporting an eTandem Project, JALT 2017 International Conference, 2017.11.

Masako Wakisaka, The correlation between motivation and learner autonomy in eTandem: A qualitative case study of a German learner of Japanese, The Seventh CLS International Conference CLaSIC 2016, 2016.12.

Yoshio Nakai, Lixian Ou, Masako Wakisaka, Rethinking learner autonomy from learners' perspectives, International Independent Learning Conference 2016, 2016.11.

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/center/tandem/index.html>

(本ウェブサイトは平成 27 年度九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト(P&P)を受けて作成し、本研究の成果を基に内容を充実させたものである。)

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：なし

(2)研究協力者

研究協力者氏名：なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。